

---

# 月光のバラッド

和泉紀伊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月光のバラッド

### 【Nコード】

N7879Q

### 【作者名】

和泉紀伊

### 【あらすじ】

売れないバンドの元ボーカルで父親の英二は夜な夜などこかへ出掛けて行く。春輔は父親の部屋に忍び込み『エンドウ豆だって休みたい』というメモと、ダイヤモンドのついた指輪を見つける。

## 月光のバラッド？（前書き）

大学に入って二作目の小説です。去年の文学フリマ用に書いたものです。部屋の掃除をしてたら出て来ました。良ければどうぞ

## 月光のバラッド？

父親の英二が出て行くのを春輔は二階の窓から眺めていた。今晚もどこかへ出かけるようだ。

いつだったか、義母とエイジが言い争っていたのを思い出す。

「妻に何も言わずに行くところなんて知れているわ！」

春輔は自室のベッドで眠ることが出来ず、薄暗い天井を見つめながら聞いていた。

何かやましい事情があるのではないかということくらい想像できたが、それを確かめてしまうと、事実を受け入れられる自信がなかった。

だから今までは口を挟まずに軽蔑のまなざしで見送ってきた。しかし先日、義母が離婚届を用意したのを知ってしまった。

英二は昔、インディーズバンドのボーカルだった。春輔は一度だけ実の母親、祥子に手を引かれて本屋の帰りにストリートライブに立ち寄ったことがある。

まだ幼い春輔に祥子は言った。

「あの人、本当はとても恥ずかしがり屋だから私たちが今日ライブに来たことは内緒よ」

『月の裏側には失くしたものが還ってくるって言っけれど、どうすれば取り戻せるのかな』

駅前のロータリーで英二たちは歌っていた。あまりの音量に春輔は抱えていた『金の斧、銀の斧』の絵本を落としてしまい慌てて拾い上げる。

周りには足を止める者は一人もおらず、彼らの音楽は誰にも届いていないとさえ思えた。まるでバンドは波間を力無く漂う難破船のように見える。

春輔は何かを英二に向けて叫んだが、すぐに雑踏に紛れてしまう。その言葉が届いたかどうかさえわからない。今では何と言ったのか、それさえ思い出せなかった。

不慮の事故で祥子が亡くなり、再婚を機に父親はバンドをやめた。今でも春輔の耳にはつきりと残っているのは葬式にやってきた親類が物陰で泣く彼に気付かずに言った、ひどい事故だったみたいよ、死に顔も拝ませてもらえなかったという言葉だった。

線香の匂いがいやに鼻をついた。

## 月光のバラッド？

父親が出かけた後、彼の部屋に入る。一度家を出ると夜が明けるまで帰らないことも珍しくないのでためらわずに電気を点けた。今まで暗い部屋にいたので、最初は目が眩んだが次第に慣れていく。部屋は適度に整備されており気を遣いながら手がかりを探す必要があった。

しかしこれと言って何かが見つかるわけでもなく、時間だけが過ぎていく。いつ英二が帰ってくるかわからない焦りから少々乱暴に引き出しを開けていった。

『エンドウ豆だって休みたい』というメモと一緒にくられた手紙の束を最後の段で見つけた。手紙は結婚前に祥子から送られてきたものだ。ひっくり返すとポストカードが一番下にあり、海面を照らす月光が満月へとつづく黄金色の道のように伸びている。

結局何も見つからなかったと思った時、部屋の隅のギターケースに気付く。おもむろに開けて見ると肝心の楽器本体は入っており、代わりに手のひらに乗るサイズの箱があった。恐る恐るふたを開く。小振りなダイヤモンドの指輪が電灯の光を受けて輝いた。

心臓が跳ねた。それは祥子が生前にしていた指輪でもなく、また義母へ贈るには少しばかり年季が入っているように思えた。鈍色に光る指輪の側面には『P・I・R』と刻まれている。

その時、ドアがきしむ音がした。

「春輔君、お父さんの部屋で何をしているの？」

義母は春輔を『君』付けで呼ぶ。けれど決して仲が悪いわけではないし、彼女なりに歩み寄る努力をしていることを春輔は知っていたし、彼なりに応えて来た。

突然、高校生の息子を持つことになった戸惑いもあっただろうと

思つて義母への引け目を感じることもあつたが、そういった姿を春輔には見せずに母親として振る舞う彼女には好意が持てたし彼女を不安がらせる父親に不信感を覚えたこともある。けれど、それでも別れて欲しいとは思えなかつた。だからいさかいの元になるであらう見つけた指輪をどうしても隠しておきたくて、義母が部屋に踏み込んだのを見てとつたさに寝間着のポケットに箱を突っ込んだ。

「何を隠しているの？」

義母の問いかけにただ言葉を濁す。

「何も隠してなんかないよ」

指輪を握つた手が徐々に汗ばむのがわかつた。先ほど跳ねた心臓が今は激しく脈打っている。

良いから見せなさいと義母が掴んだ腕を振り払い、勢い余つて本棚に自分の手をぶつけてしまった。数冊の本と一緒に指輪が落ちる。

「この指輪はここで見つけたのね？」

認めざるをえなかつた。今まで気付かなかつたが義母からは柑橘類の香りがした。

## 月光のバラッド？

階段に座って耳を傾ける。

『P・I・R』はI・Rに贈るって意味なんじゃないの、と義母が声を荒げるのが聞こえた。

春輔は英二が何も言わないことに憤りを感じた。それでは自分の非を認めているようなものじゃないか。春輔は腹を立てていたが、それ以上に不安だった。膝を抱え、一心に暗がりを見つめると、離婚届のことが脳裏に浮かぶ。

「何をするの！ 離して。ちょっとその指輪を持ってどこに行くつもりなのよ。まだ話は終わってないでしょ」

玄関のドアが閉まる音がした。父親の背中を春輔は夢中で追いかける。今しかチャンスがないと思ったからだった。

満月を少し欠いた月が彼らを迎える。

「春か。ちょうど良かった。一緒に来るか？ お前にも関係あることだから」

そう言う父親の顔がいつにも増して若々しく見えた。

人通りも車の往来もない寝静まった街を二人は歩く。空にかかった月に指輪をかざし、月光に透かしているような仕草をする。父親は愛おしいものを見つめる表情をしているがどこか寂しげだった。

「お前が見つけたんだってな、これ」

「ごめん」

「過ぎたことは仕方ないさ」

それにもう終わりだ、と英二は続ける。何かが吹っ切れたとても穏やかな口調だった。

「捨てる場所を探していたんだ、ずっと」

指輪はコートのポケットに大事そうにしまわれた。

祥子の葬儀が終わり、静寂に包まれた家の中。お互いに何を話せばいいかわからず押し黙っていた。二人で一つの哀しみを噛みしめていたのかもしれない。どちらにせよ話し合う余裕などなかった。おもむろに英二は本棚から角がつぶれてボロボロになっちゃった『金の斧、銀の斧』の絵本を取り出してゆっくりとめくり、泉の女神が正直者の木こりに金と銀、鉄の斧を手渡す挿し絵で手を止める。

「失くしたものがおまけまで付いて還って来るなんて都合のいいこと、ねえよな」

強がってシニカルに笑う父親の背中がとても小さく見える。

## 月光のバラッド？

海の匂いが鼻をつく。波間で月光が揺らめいていた。月に手が届いてしまいそうで、春輔は少し怖かった。引き寄せられた時、帰って来れない気がして、一歩だけ後ずさる。波がくだける音がした。遠くで焚き火をする二人の人影が見えた。

「そう言えば昔、祥子には内緒で赤ん坊の春を連れて海に来たことがあったな。まあ覚えてないか」

「母さんも父さんに内緒で僕をライブに連れて行ってくれたことがあるよ」

祥子から聞いたよ、と英二は苦笑して続けた。「春輔には内緒にするように言ったから内緒にしてって言われてな」

「僕を育てるために、バンドやめたんだよね」

「後悔はしてない。それが父親だろ？ 若い頃は権利を主張する歌ばかり作ってたけどな」

英二は裸足になって波打ち際に立つと、指輪を取り出した。

「人工ダイヤって知ってるか。特殊な機器を使ってダイヤモンドが生成されるのと同じ環境を作り出して、人工的に作り出す技術だ。すごいよね。同じ炭素原子の鉛筆の芯からでも作れるらしい。そして、遺骨からも」

「葬儀の時、遺体は見せられなかったんじゃない棺に無かったんだよね」

ちよつとダイヤモンドになりに行ってたんだ。英二は俯きながら言った。波が帰っていく時に足下の砂が海に向かって削られていくのが伝わってくる。海に誘われているように感じた。きっとその先に祥子がいるのだと思ったけれど、春輔と今の妻の顔が脳裏をよぎり、まだ当分逢いに行くことが出来そうにないことを心の中で詫びる。

「俺は祥子が死んだ時に音楽と一緒に自分自身を置いて来ちゃった

んだ。だけど再婚して気が付いた。俺は過去に縛られてたんだ。今は結衣子さんを精一杯愛さないといけないってのにな」

くすんだ指輪を一瞥し、英二は強く握りしめた。

「だから指輪を捨てることにした。だけど困ったよ。この指輪は祥子そのものなんだぜ。下手な場所には捨てられない。かと言って、本当のことなんて言い出せなかった。軽蔑されるのが、怖かったんだ」

本当に参っちゃったよ。そう言う英二の姿は、春輔にはとても弱々しく映った。普段は目にするこのない姿はまるで地球からは見るこの出来ない月の裏側を見ているようだった。

「付き合ってた頃に祥子から来た手紙を見返してて、ムーンリバーの絵葉書を見つけた時、捨てるなら海しかないと思ったね。月になんてどう行きやいいかわからねえよ。取り戻せないなら、いつそのこと還すだけさ」

英二が海に向かって踏み出す。冷たい波がくるぶしを撫でた。立ち止まり、英二は夜空を見上げる。

「ここからなら、月にだって届くよな」

## 月光のバラッド？

「お義母さんにちゃんと話そう」

「わかつてもらえるわけないだろう」

「それでも話そう。僕も一緒に説明するから」

春輔は語調を強めた。父親の中の祥子が永遠に失われてしまう気がして捨てさせるわけにはいかなかった。

「元でも父さんはミュージシャンだろ。だったら言葉で伝えろよ。月に届けるより、その方がずっと早い」

なんだそれ、と振り返った英二の苦笑する顔が月の光に浮かび上がる。陰影のせいか昔よりも父親の顔はやせ細って見えた。

「ミュージシャンが息子に口げんかで負けるなんて、格好つかねえじゃねえか」

「違う。春輔はシニカルに笑う。父親に似てきたと思った。」

「春。よく見たらお前、いつの間にか俺より背が高くなってるじゃん」

英二のライブから帰ってすぐに春輔が眠気をうつたえたため、寝かしつけた祥子はノートの切れ端と睨み合いながら電子辞書を引く英二に歩み寄り、傍らに腰を下ろす。覗き込むところどころに英語と日本語が交互に綴られている。

「何をしてるの？」

目線を紙から外さずに英二は答えた。

「バンドの仲間が作詞したつつうから添削。格好つけてスラングなんて使うからスペルミスがひどいんだ。R・I・P（Rest In Piece）がP・I・R（Piese In Rest）になってるじゃねえか」

勘弁してくれよと英二が頭を抱えて口を尖らせる姿が夏休みの最終

日に宿題が終わらない子供のように面白かった。

「ねえ、レストインピースってどういう意味なの？」

「『安らかに眠れ』だっけな？」

興味本位で祥子は電子辞書に『Rest In Piece』を打ち込む。和訳すると『エンドウ豆の中の休憩』と表示された。

「合ってるのか、これ？」

「さあ？ でもエンドウ豆のさやでなら、ゆっくり眠れそうね」

「おとぎ話みたいだな」

英二は肩をすくめる。好奇心から、祥子から電子辞書を受け取って『Piece In Rest』を調べてみた。

「休憩におけるエンドウ豆、だとき。エンドウ豆が休んでどうするってんだろうな」

「あら、良いじゃない。『エンドウ豆だって休みたい』」

「良い言葉だ」

英二は祥子に寄り添う。彼女からは甘い香りがした。そして「エンドウ豆だって休みたい」とつぶやいてみる。体の中で反響させるように。

「エンドウ豆だって休むんだからあなたも頑張りすぎないで」

背中が温かくて心地良く、少し眠くなる。

「そつえばライブ行ったわよ」

眠気が吹き飛ぶ。

「まじかよ。それすげえ恥ずかしいんだけど」

でも悪くなかったと彼女がささやく。

英二は思い出していた。人混みの中、どんなに声を張り上げても街の雑踏に自分たちの音楽がかき消されてしまう。漂流しているかのような心細さを感じた。どんなに自分たちを主張しても、誰も見向きもしない。足を止めてはくれない。誰にも届かない。不安に駆られ、あまりに惨めに思えた。

「おとうさん、がんばれ」

春輔の声が聞こえたのはその時だった。人の波を見渡してもその

姿を見つけることは出来なかったが、それでも頑張れる気がした。

自分はここにいる。胸を張ってそう言えると思った。

温もりの中で微睡みながら英二は、ちゃんと届いてたんだなと呟き、ゆっくりと目を閉じた。

やすらかな時間が二人に訪れる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7879q/>

---

月光のバラッド

2011年7月4日03時38分発行